

1957年10月4日、ソビエト連邦によって打ち上げられた世界初の人工衛星、スプートニク1号。  
©UPI/amanaimages

## アメリカの青年は なぜロシア語を学んだか？

ロジャー・パルバー

(作家)

ニューヨークで生まれ、ワルシャワ、パリに留学したのち京都に移住。  
さらには東京で様々な活動を展開し、現在はオーストラリアに在住する筆者。  
その波瀾に満ちた道程をふり返り、「自己」とは何か、  
そして「言語」とは何かを語ってくれた。

最初に告白しておいたほうがよいでしょうが、ぼくは本当に、本当に「Identity」という言葉が嫌いです。

何より最悪なのが、日本語にもするりと忍び込んでいく点です。アイデンティティー。読者のみなさん、どうですかこの文字。背骨が何か折れてガタガタになった蛇みたいじゃありませんか。「I」なんていうシッポまでついている。蛇足を加えて恐縮ですが、ソース、テレビ、スマホ、パトカー、アクセル、アパート、セーター、シャワー、インテリ、ドイツなどなど、たいていのカタカナ語は対応する外国語に比べて表記が短くなります。カタカナ語はだいたい小綺麗でしなやかな形なのに、日本の蛇たる「アイデンティティー」は、実に不恰好な動物です。なぜこの言葉が嫌いかと言えば、私たち人間は誰もがひとつ以上のidentityを持っているはずだからです。私たちは、あらゆるパーツからなる総体です。そこにはたとえばエスニシティ（これもまた身の毛もよだつシッポの長いカタカナ蛇です……）、文化、性的指向、宗教、年齢といったパーツが含まれます。こうしたすべてが合わさって「自己」を形成しています。

その自己を他者に対して表現するのが、口頭であれ文字を通してであれ、言葉なのです。

### 外国語を学ぶモチベーション

ぼくは、ひとつの言語しか使われない家庭で育ちました。ぼくが子供のころ外国語に触れた経験は、日本で育つ場合と同じくらい限られたものでした。それ以上に少なかったとさえ言えるかもしれません。いまの子供たちは、あらゆる形で英単語と接していますから。日本語には数多くの英単語が使われています（英語にも外国由来の言葉は多く存在していますが、日本語における外国語ほど目立つものではありません）。

（せん）。日本の子供たちは誰でも、英語やその他の外国語のポッドキャストにアクセスすることができます。最近では、多くの駅や公共施設案内に英語・中国語・韓国語の翻訳がついています。都市によっては、電車のなかで英語のアナウンスが流れることもあります。

ぼくがわずかながらに触れた外国語といえませんが、近所にはメキシコ系の人たちがたくさん暮らしていたのです。しかし彼らはアメリカの（つまり英語での）暮らしに溶け込むことに力を注いでいました。メキシコ系の友人たちは、自分の国の言葉で話すことを恥ずかしく

がっていました。そして私たち「アメリカ人」は、彼らの言葉や文化やライフスタイルに何の関心も払っていませんでした。なにせ、それは一九五〇年代のことで、アメリカとアメリカの文化が世界を席巻している時代でした。

だから、どうして外国語など学ばねばならないのだろうか？ 当時はそう考えていました。世界中どの国の人も英語を話したがっていたのです（少なくとも、そんなふうには教えられ

てきました）。「彼ら」が「私たち」の言葉を学ばなければならず、その逆ではない。子供のころは、こうした態度が文化・民族的な帝国主義の極みであるとは考えもしていませんでした。アメリカでは、そうした態度が普通だったので。ほかの言語を学ぶ必要はありませんでした。必要性こそモチベーションの母となるものです。

つまり、私は外国語に触れる機会や外国語に対する関心という点で、日本の子供とほとんど変わりなかったのです。

ほかの多くの国の子供たちは事情が違います。インドでは五億人以上がヒンディー語を第一言語としていますが、その母語を第二言語や第三言語として使っている人たちはもほかに一億六〇〇〇万人ほど存在しています。ベンガル語、マラーティー語、テルグ語、タミル語、グジャラート語、ウルドゥー語、パンジャブ語などでも同じくらい多くの割合で母語が第二・第三言語となっています。オランダ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの子供たちは、ほとんど全員が英語でそれなりに意思疎通ができます。かつてヨーロッパの植民地だったアフリカ諸国の人たちは、自国の言葉ひとつ以上に加え、たいいてい宗主国の言葉も使っています。こうした人々に外国語を学ぶモチベーションは必要あり

この続きは本誌でござい！